対話型授業のつくり方 -実践編-

話し合いを活性化させる進行の技術

PROFILE

大木 浩士 おおき ひろし（株式会社博報堂 H-CAMP企画推進リーダー）

1968年生まれ。栃木県出身。千葉大学卒業後、経営コンサルティング会社を経て、2001年より博報堂勤務。マーケティングや広告制作等の業務を経て、2013年に中学生・高校生を対象とした教育プログラム「H-CAMP」を立ち上げる。7年間で600回以上の対話型授業を開催。2016年には、経済産業省が主催する「キャリア教育アワード」で、経済産業大臣賞と大賞を受賞。
著書に『博報堂流・対話型授業のつくり方』（東洋館出版社）がある。

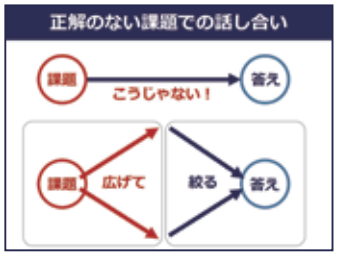
1 『たくさん考え、絞る』話し合い

博報堂の仕事は、得意先の課題を解決するための企画やアイデアを考えることです。CMや広告に限らず、多様なテーマで新しい解決のアイデアを生み出していきます。アイデアを考える際に欠かせないのが、話し合いです。よく「ブレインストーミング（略してブレスト）」と呼ばれるもので、雑談のような雰囲気の中、多様な意見や発想がユニークに飛び交います。

私は8年前から、中高生を対象とした対話型授業を、会社の社会貢献活動として行っています。「発想する力を、体験を通して楽しく学ぶ」ことを目的とした授業で、社員の行うブレストが目指す姿です。この刺激的で楽しい話し合いを、生徒たちに体感して欲しい。そのため、博報堂のブレストを分析し、話し合いを活性化させる進行の技術を多数見つけ、整理しました。今回は、特に重要な2つの技術をご紹介します。

1つ目は、『たくさん考え、絞る』という話し合いの進め方です。博報堂が対峙しているのは、正解のない課題です。正解がないものをテーマにブレストをする場合、「拡散の話し合い」と「収束の話し合い」を分けて行います。

広げながら、まとめない。安易に、結論らしきものに飛びつかない。重要なのは、“まずはたくさん考えること”です。広げる話し合いの時、私たちは「質より量」という言葉を大切にしています。それが優れた意見かどうかはどうでもいい。くだらない意見も含めて、とにかく数を出します。



もし生徒たちの発想力を鍛えたいと思うのなら、拡散に集中させ、徹底的に数を出す体験を積ませることだと思います。広げる時の話し合いは、思いつき発言、大歓迎です。くだらないと思う意見や素朴な疑問から、発想が広がったり、物事の本質にたどり着いたりすることはよくあります。

考えを広げ切った後は、絞り、まとめます。収束の話し合いを、拡散の話し合いの後に、別途設けます。広がった話を一つの意見としてまとめることは、慣れていないと難しく感じるものです。そのため、収束の話し合いの前

に、私は生徒たちにいくつかのアドバイスを送ります。

「今考えていることに、正解はない。無難であることよりも、新しさや独自性を大切に。」「まとめるとは、考えを選び、焦点を絞ること。すべての意見を盛り込むことではない。」「選ぶ時に、自分たちの心が動いたかどうかを思い出す。笑いや気付き、驚きはあっただろうか。」、このようなことを共有した後に、収束の話し合いがスタートします。

2 『話し合いのルール』を伝える

進行の技術の2つ目は、『話し合いのルール』を伝える、です。社員が行うブレストには、話し合いを活性化させるための暗黙の了解事項がいくつもあります。私はそれらを言語化し、生徒たちに共有しています。主なルールを3つご紹介します。

①**「批判をしない」**。どんな意見が出ても、人の意見に批判や否定をしない。まずそのことをルールとして全員に伝えます。これから行う話し合いには、正解がない。だから間違いがない。感性や価値観は人それぞれ。批判をするのではなく、違いを尊重しようと生徒たちに話をします。

②**「聞いていることを態度で示す」**。批判をされると人は傷つきますが、無視をされても傷つきます。そこで、人が話をしている時にできるだけ頷いたり、あいづちを打ったりすることをルールとして共有します。

③**「脱線OK!」**。話し合いの時間を10分以上確保できる場合、「本題と関係のないことに話が広がってもOK!」というルールを伝えます。人の話を聞いていると、疑問が生まれたり、何かがひらめいたりすることがよくあります。それらを話題にすることは、発想を広げる上でとても大切なのですが、実際には多くの生徒が気兼ねをして発言を控えてしまいます。「関係ないことを、話してはいけない」、その先入観を、ルールを伝えることで壊します。脱線OK。だから、一見関係ないと思うような質問もOKになります。

生徒同士の話し合いが活性化しない大きな理由の一つは、恐怖感です。「批判や否定をされたらどうしよう。」「無視をされたらどうしよう。」「変なことを言ってはいないだろうか。」、こうした不安や恐怖を取り除くことが、『話し合いのルール』を伝える目的です。これらのルールを伝えるか伝えないかで、場の雰囲気は大きく変わります。

博報堂流・体験ワーク② “かけ算”で発想する

発想を広げる際、私たちはよく“かけ算”の手法を用います。異なる言葉や物事を、イメージの中でかけ合わせ、連想を広げていくのです。

例えば「コーヒー」をテーマに新しいイベントのアイデアを考えるとします。その際、雑誌や本を数冊手元に置き、ページをめくりながら、気になる言葉に意識を向けます。「看板娘」「五感」「ふたりきり」「異種格闘技戦」などの言葉が見つかります。それらの言葉とコーヒーとをかけ合わせると、「コーヒー看板娘」「五感コーヒー」「ふたりきりコーヒー」「コーヒー異種格闘技戦」などの言葉となり、イベントの妄想がかき立てられるわけです。

考えるテーマとかけ合わせるのは、「自分たちが興味あること」「欲求」「世の中で流行っていること」などでも良いと思います。まずは、興味あることや欲求について、生徒同士で意見を出し合ってみる。その後、考えるテーマと“かけ算”をしながら、新しいアイデアを生み出してみる。このような発想法を使い、「新商品のアイデア」「特産品のPR方法」「授業を楽しくするアイデア」などを、生徒たちと楽しく考えてきました。かけ算の発想法、ぜひお試しください。